

市民科学講座（講演&ワークショップ）

ケータイ、スマホは子どもに必要か？～依存症と電磁波健康リスクから考える～

【報告その1 ワークショップの部：参加者との意見交換を主として】

【報告その2 講演の部：電磁波健康影響と依存状況に関する基礎データ】 は次号29号に掲載

2014年9月27日（土） 文京区アカデミー茗台・学習室 A

講師&ファシリテーター：上田昌文（市民研・代表）

はじめに

電磁波の問題は2000年くらいから取り組みだしたのですが、やればやるほど、これはいろいろ問題が大きいくらいということがわかってきました。世界の動向を見ても、すでに多くの学者や国の機関が警告を発しているのに、日本では全く規制が作られず、今のままでは、本当にまずいことになるのではないかと考えています。今日このような集会をしても、一番問題な、携帯漬け、スマホ漬けの中高校生や大学生にこそ実は聞いてほしいのですが、なかなか来てくれません。学校にアプローチしようとしても、学校の壁は厚く、ドコモやソフトバンクが携帯のことを説明すると言って学校に来て、授業をしたりしますが（注1）、その場合は、ネットのトラブルをどう防止するか、つまり、知らないうちに有料サイトに繋いでしまって法外な料金を取られるとか、LINE によるいじめとか、そういうことを避けるために使い方を指導しようと、会社の側から派遣されてくるのです。でも電磁波のことについては、全く触れない。メーカーにとっては不都合な事実であるからですが、これは放っておいていい問題ではありません。なんとか一般市民の意識を喚起して、少しでもこの問題を解決していければと私は思っています。

[1] 自己紹介そして携帯、スマホについて、日頃思っていることを話してもらおう

N さん（女性）：小学生と幼稚園年中の子どもの母です。私はガラケー（スマートフォン以前の携帯電話）なので、他のお母さん達についていけていません。子どもの学校などの名簿は携帯メールアドレスで作られているのですが、LINE の方が便利だということで、LINE で繋がっている人とは繋がれないということがあります。大人はそれでもいいと思うけれど、子どもが中高校生になった時に、スマホがないから友達と繋がれないということがあるのだろうか、と気になっています。

H さん（男性）：良いおもちゃと良い遊びを通じて、お母さんと子どもとの絆をつくる、という活動をしてきたのですが、最近のお母さんは、赤ちゃんにあの小さい機械を与えてしまう。赤ちゃんはそれなりに興味を示しているようで、お母さんに聞いてみると、「うちの子は、どんなおもちゃを与えても遊ばないのに、携帯にだけは熱中する。こんな素晴らしいおもちゃをこれからも有効に活用していきたい」と言います。お母さん達の集まりに行くと、子ども達は携帯を見ているんです。電磁波の問題もありますが、中高校生達にはそれ以外の問題があるのを認識していながら、赤ちゃんの頃から携帯を渡して、積極的に使っていくとこれからどうなるのかと気になり、知識のある方に教えていただけたらと思って来ました。

K さん（男性）：趣味でヨガをしています。ある時ヨガの合宿で、たまたま電磁波の話を知りました。それ以来いろいろな媒体に、電磁波のことが出てくるのに気がつくようになりました。子どもの携帯、大人も含めて、携帯を使っていると将来的に、健康障害や、凶悪犯罪に引き込まれる恐れがあるのではないかと考えています。電磁波を安全に使えるようにと思って参加しました。

W さん（男性）：2003年くらいから、鉄道会社、バス会社とか、いろいろな所と意見交換をしていますが、どこも医療機器への影響しか考えていない。「携帯を使う車両」「使わない車両」の住み分けをした方がいいのに、そのまま使われています。私は出版の仕事をしており、日本で、電子黒板や、タブレットとか、無線が教育に使われていくとどうなるか。児童書では、私の会社ではなく他社ですが、絵本や子どもの情報をスマホで見られるようにしています。お母さん達が試し読みをするのが気になります。

A さん（男性）：県会議員として毎月、市民勉強会として、子どもを大事にするための学習会を開いています。是非上田先生にも来ていただきたい。私は子どもがいませんが、子どもを大切にすることには強い関心があります。愛知県では、刈谷市が9時以降は携帯禁止という時間制限をしていますが、健康を守るために大人が規制する事も必要ではないかと思っています。

T さん（女性）：私は、キリスト教の神学校を卒業してから人権活動をしています。娘の子どもの3歳の孫がいるのですが、私なら、子どもを寝かしつける時は子守唄を歌うのに、娘はスマホでやるんです。一応制限をかけているつもりなのか、娘は、「寝る時だけね」と孫にスマホを渡すのですが、孫の目が輝いているのです。この先どうなってしまうのだろうと思って今日来ました。

D さん（女性）：健康問題を考える NPO を設立して10年。今老人、子ども達が心身ともに病んでいます。一番問題なのは、やはりコミュニケーションが希薄になっていることだと思います。私たちの NPO では、「ふれあい広場」を全国で開いているのですが、子ども達が一つの部屋に集まっても、みんなで遊ぶということができなくなってしまっていて、それがとても怖いことだと思い、「ふれあい広場」に来る時は、携帯ゲームは禁止にしています。上田先生の資料を読んだり、勉強会を開いて勉強したりするうちに、電磁波の問題について、日本では、私たちの健康よりも、経済の発展が重要視されているのではないかと考えています。日本の将来のためには、原点にもどって、本当の健康とは何かを、みんなで学ぶ必要があるのではないかと思います。電磁波は見えないから、その怖さがよくわからないということが一番の問題点だと思います。今日も資料をいただいたので、これを広場に持ち帰って勉強会をしたいと思っています。

M さん（男性）：私もやはり健康づくり関係の NPO をやっています。電磁波の勉強も20年前からしてきました。その前は、45年間欧米の外資系航空会社に勤めておりましたので、知人や友達は外国の人が多いのですが、彼らは「電磁波は体に悪い」とはっきりと認識しています。電磁波がすべて体に悪いというわけではないが、自然の電磁波と、人間が作り出す携帯電話、電気自動車やリニアモーターカー、あるいは日本航空も研究している電磁石で車体を動かすことなどが、身体にどのような影響を及ぼすかについては、何の発表もありません。企業と行政を動かしていかないと、民間レベルでは無理。行政が積極的に動く民間も動くと思います。体に悪いということは証明されていると思いますが、実際にどうすれば子ども達を守れるのか。消極的な方法では「イヤホンを使う」とか「寝る時そばに置かない」などがありますが、もっとなんとかしないと。日本だけでなく外国でも、異常な事件が起きていることに、ひょっとして関係があるのでは

ないかと思っています。

Xさん（男性）：電磁波測定を長いことやってきました。ドイツの研究で、人間の脳の松果体にまで異常を起こすことで人間を危険にするのでは、というのがあります。誰でもいいからと殺人したりするのはそれも関係しているのではないのでしょうか。測定していて一番怖かったのは地デジ。情報量を多く流すので、昔と違い、変調波で流されているのです。

Yさん（女性）：一番気になっているのは、赤ちゃんの頭のそばで携帯をいじっている人です。

[2] 配ったカード（大型の付箋紙）に、子どものスマホ、携帯のことで気になることを、1枚に簡潔なことばで一つ書いてもらう（できれば一人4～5枚書いてもらう）。そしてカードに書いたことを、それぞれの人が同じテーブルの周りの人に見せながら説明して、共有する。

【カードに書かれた言葉から】

- スマホで目が悪くなる。
- 赤ちゃんの発達に影響があるのでは？
- 大人も小さい画面からいろいろな情報を得るだけでは、心の視野が狭くなるのでは？
- 小中高の子どもが使うと親も使っている。
- スマホを持たせて遊ばせていると、大きくなってどうなるのか心配。でも親はあまり関心がない。
- スマホの刺激とか情報が子どもの脳の発達にどう関わっているのか。わけもわからない子ども達の脳の中でどういう刺激になっているのか。人体実験ではないのか。
- お母さんと赤ちゃんの間で、アナログ刺激というか弱い刺激、つまり、目で見て、手で触るといった刺激を、繰り返し繰り返し与えるのが良いと思っている。
- 赤ちゃんのうちからスマホで遊ばせていいのか。

[3] 米国にある「Moving to Learn～Exploring the Effects of Technology on Children（学びに向かって：技術が子どもに与える影響を探る）」という NPO（※注）が基本的主張として発表しているメッセージがあるので、それを翻訳して紹介

※注 この団体のホームページは <http://movingtolearn.ca/>

以下のメッセージは Fact Sheet の項に印象的な写真とともに掲げられている。

<http://www.zoneinworkshops.com/zonein-fact-sheet.html>

「運動、ふれあい、他の人とのつながり、自然」 この4つが子どもの成長に必要です。

「座りっぱなし、孤立、刺激が強すぎる、相手にされない」このような技術（無線デジタル技術）のもとでは、子どもは生きのびられない。運動と遊びなしには生物として生存できないのです。

子どもの肥満、糖尿病や心筋梗塞も増やす。デジタル技術との繋がりは自然や自分や他人や精神との繋がりを断つことになり、ソーシャルネットワークによって、子どもはうつ状態、不安、孤独感を持つようになります。人間関係の衝突のリスクが増加しています。

親や教師は子どもと技術との繋がりを一度断ち、新たに繋がりを作らないとなりません。米国子どもの6人に1人は何らかの精神疾患を持つと診断されて薬を服用しています。暴力は生まれつき身につけているのではなく、後天的に身につくもの。脳にインプットされた画像や映像の暴力的なシーンは、生涯に渡って何度でも再生することができるので、暴力的な情報にさらされた子どもは、周りに対して、物理的にも性的にも暴力的なふるまいをするようになるかもしれません。

無線デジタル技術の過剰使用は、前頭葉のニューロンの接続を減らしてしまいます。前頭葉は、外からの刺激の調整とか、学習機能とかの中枢を担っています。無線デジタル技術に偏っていると、十分に前頭葉が使えなくなってしまいます。

無線デジタル技術を過剰に使用している子どもは、記憶障害、いらいら、集中力の欠如など、「デジタル認知症」とでも言うべき症状になってしまいます。10人に1人の子どもが、米国では ADHD（注意欠陥多動性障害）と診断されています。人間は今まで、技術を使って進化してきたと思ってきたのが、今では「逆進化」をしているのではないのでしょうか。

教育の場に、どんどん無線デジタル技術が入っていますが、効果があるという確かな証拠があって導入されているわけではありません。事実をこの技術でスキャンすることは、学ぶことではなく、教えるのはあくまで先生であって、技術ではありません。無線デジタル技術を減らし、技術の代わりになるものを探し、教育内容の改良が必要です。なんらかの発達の遅れを抱えたまま学校に入学する子どもの3人に1人が、働くのに必要な読み書き能力を学ばず、高校を中退しています。

私たちが与えようとしている無線デジタル技術による教育は、決して持続可能ではありません。技術の過剰使用によって、今の子どもたちは、初めて、親よりも長生きできない世代になるでしょう。

「運動、ふれあい、人との繋がり、自然」が、子ども達の成長には必要なのです。無線デジタル技術は人を

拘束し、子どもがそれに費やす時間は、発達や学習にとって有害です。

無線デジタル技術を学習に使えば有意義だとは言えません。ゲームをさせると子どもは熱中するからいいだろうと思われていますが、読み書き教育に無線デジタル技術を使うのは非常に効率が悪いのです。パソコンをアップグレードする代わりに、遊び場をアップグレードし、子ども達にどうやって読み、自分達で印刷できるか教えましょう。

今の子どもたちほど、椅子に座ってばかりで、刺激にさらされ、孤立している子どもたちはいませんでした。日常的な技術のチェック、無線デジタル技術による教育を減らしていくためのツールを提供することが親達には必要です。大量に入ってくる新しい技術が、本当に良いものなのかどうか、親たちはチェックできなくてはなりません。

政府はなぜ口をつぐんでいるのでしょうか。なぜ行動を起こさないのでしょうか。無線デジタル技術にリスクがあることを警告するための法的措置を取り、インターネットを使ったゲームや、ポルノを提供する業界に規制をかけ、親達に公衆衛生上のキャンペーンに対する啓発を行うべきです。

この技術が子どもたちに悪影響を及ぼしていることの研究（医学生理学、社会学的研究）結果が、一般の人々が知ることができるように、研究者は、公共のメディアに働きかけ、しっかりした情報を発信させるようにすべきです。ニュースでたまに知らせるだけでなく、系統だった情報提供をするべきです。

（講師コメント：米国では有名なテレビ番組で、「携帯電話で脳腫瘍が発症する」と言う学者と、それに反論する学者が登場して、ゴールデンタイムに激しく討論するような番組が放送されています。日本にはこれまでまったくこのような番組がありません。日本の研究者は腰が引けすぎているのではないのでしょうか。）

企業はきちんと警告をするべきです。こうした技術を提供する時に、これまでわかっている健康影響をとりあげて、「子どもの肥満、発達遅滞、精神遅滞、攻撃性や不安や鬱状態の亢進、注意欠落、学習障害の恐れあり」と責任を持って警告を表示して売るべきです。

[4] 参加者からの質問や意見を受けて（1）

Q：日本では反対賛成の討論が少なく、政府が勝手に選んだ学者さん達を勝手に選んで、その意見だけを出しているのではないのでしょうか。

A：それは根が深い問題で、電波のことは総務省に長年電磁界の生体影響を研究している事業が（「電波の安全性に関する調査事業」）があります。毎年数億から十数億円くらいのお金を使って研究を委託したり公募したりしてきました（※注）。

※詳しくは、次の論考を参照

「電磁場の人体影響についての総務省の調査研究事業」『市民研通信』2011年より

<http://archives.shiminkagaku.org/archives/2011/04/post-265.html>

一応、「良いテーマがあればお金を出す」と言っていますが、やっている人たちは毎年ほぼ同じ人、同じグループで、その結果出てくる結論は「健康には影響があるとは考えられない」とするものが圧倒的に多く、不確定の部分については「さらなる研究をすすめる必要がある」と指摘するのが決まり文句になっています。総務省のこの分野の審議会である「生体電磁環境に関する検討会」では海外の論文を手広く調べることもやっていますが、どうも判断のあり方が、「影響なし」の論文が「影響あり」に比べて多いから、という理由付けで、「現状の規制を変える必要はない」という点に収まってしまふことが多くて、散在する「影響あり」をどう受け止めてより踏み込んだ整合的な解釈をほどこしていくか、という姿勢が希薄です。だから結論はほぼ常に

「現時点における科学的知見を総合的に考慮した結果として、我が国における電波防護指針に対して、熱作用・刺激作用以外の影響を考慮した長期的影響の可能性について配慮するする必要はないと考えられる。」

（『生体電磁環境に関する検討会 中間報告書（第一稿）－人体への影響関連－』2014年9月3日第3回会議資料87ページより http://www.soumu.go.jp/main_content/000320857.pdf）

となってしまうのです。この検討会から、電磁波健康影響に関する研究の新機軸が提案されたり、電波利用の爆発的な普及がもたらしつつある長期大量曝露なり依存症などの問題に予防的に対応したりすることは、ほとんど期待できないように思われます。

市民は、制作や規制に関わる人たちの構造的な問題を知った上で、学校、自治体単位でもいいですから、自ら必要だと思う対処を自身で施していかなければならないのです。

Q：これは提案ですが、使わせないために、もう一步踏み込んで、煙草じゃないけど、身体に悪いことが多少わかってきたので「害になりますよ」と言う。携帯を使うなどと言っても、企業だって客に売り込んでいる時なので、使わせないようにするのは無理だとしても、企業が技術を、より安全な方向に持っていけばいいのではないのでしょうか。（電子レンジの扉に電磁波シールドを付けたように、携帯自体を安全になるようにする）

Q：子どものことについては、しつけだけではうまくいったためしがないので、政治が重要だと思う。IT 企業を持ちあげ、デジタルおもちゃを増やして景気がよくなったとしても、それで政治が子育てに真剣に取り組んできたと言えるのでしょうか。子育ての面からこの問題をしっかり考えてほしい。

A：今子育てをしている人や、これからする人に考えて欲しいのは、あまりにも携帯にのめり込むと抜けだしにくくなるので、例えば一週間電波の通じない山にこもるといったような、あえて「電波断ち」するようなことも必要なのではないかと思います。依存症の治療として実践しているお医者さんもいます。

[5] 携帯・スマホという技術が多様な社会問題を持っていることを確認（上田）

全国民のうちほぼ1億人が携帯を使っていますから、携帯電話産業は、月1万円の通話料金を皆が払っていたとすると、通話料収入が全体で年間約12兆円に達するという巨大産業です。産業に大きく貢献し、利便性は一度手にすると手放せません。福祉としても、おじいちゃん、おばあちゃんが、なかなか家族に会えない時に、せめて声を聞ける、というようなバーチャルなやり取りができるという利点があります。

公共施設との兼ね合いで、トラブルが（携帯電話時の声への不快感など）潜在的トラブルのもとでもあり、公共的には固定電話の屋外設置がどんどん減っていることもあります。私は携帯を持たないので、待ち合わせに遅れそうな時、必死で探すのですが、なかなか見つかりません。

他にも、犯罪や事故に巻き込まれるとか、心臓ペースメーカーへの影響の問題もあります。最近では「ながらスマホ」といって、歩きながらスマホを見ていて、人にぶつかって大怪我をさせたり、スマホを見ながら歩いている人が、足元を見ず、線路に落ちて死んでしまったり……と多くの事故事例が報告されています。道を歩いていてもそういう姿の人を实によく見かけます。

「家族割引」などがあっても、通話料もばかになりません。大学生を見ている、「携帯電話のお金を稼ぐためにアルバイトをしているのではないか」と思いたくなるくらい、通話料に追まられています。

環境負荷（廃棄物）の問題もあります。携帯には、貴重なレアメタルが入っているのに、リサイクルが進まずに家にため込んでいる人が多い。個人情報やショップに持ち込めば目の前でただちに潰してくれて、二度と再生できませんから、安心してリサイクルに出してほしいと思います。

インターネットの不適切な利用で数多くの事件や事故や犯罪が生まれていることは言うまでもありませんが、その多くに、携帯やスマホの使用がからんでいます（※注）。

※例えば総務省が出している「インターネットトラブル事例集」にそうした事例が出ています。

http://www.soumu.go.jp/main_content/000173733.pdf

携帯基地局も、その設置にあたって周辺住民に合意を得るところか告知さえもしないまま建ててよいことになっているので、今でもトラブルが絶えません。明らかに法的な不備があるのです。

こうしたじつに多様な社会問題があるなかで、今日は健康問題と依存症の問題に焦点をあてているわけです。

[6] 参加者からの質問と意見を受けて (2) ～ワークショップの最後の部分での質疑と討論

参加者：電磁波は車や新幹線に乗っていても出ていると荻野晃也先生に聞きました。新幹線ができて新幹線に乗るビジネスマンは携帯も使う。そういうことで不妊症が増えてきたのではないのでしょうか？

上田：高度成長期は、新幹線以外にも、ダイオキシンとか PCB とか、色々な環境汚染原因も増加してきたので、疫学調査でさかのぼって不妊症の原因を特定していくことは大変難しいでしょう。

参加者：電磁波の問題を一般の人に知らせるのは難しい。20年前のファミコン全盛時代、NHK 放送文化研究所の方が、「ファミコンのせいで、運動能力が劣ってくる」、とか、森さんという方が「ゲームのやりすぎのせいで認知症になる」とか、いろいろ話してみたのですが、「いいじゃない、子どもが楽しんでいるんだから」と冷淡に受け止められた。携帯を赤ちゃんに使わせることも何とも思わない人ばかり、何を言おうと注意をひかない。どうしたら伝わるのでしょうか？

上田：携帯電話についてはメーカーが牛耳っています。大企業を動かすには、決定的な科学的証拠が示せるか？今は精子への影響はかなりはっきりしてきています。これを企業に示したら、どう反応するのでしょうか。おそらく「いや、それはポケットに入れるような使い方をしなければ大きな問題にはならない」と答えるでしょう。じゃそれを説明書の警告に書いてください」と要求すべきですが、それをどれくらいの消費者が支持するでしょう？ 消費者の意識を変えるのは相当難しい。意識の高い人しか変わらないでしょう。でも、「健康影響があるかもしれないのですよ」ということを公教育や消費者教育の場に持っていければ変わるかもしれません。携帯基地局裁判などでは健康被害の問題が直接とりあげられています。

脳腫瘍になった人は（原因が）携帯電話電磁波がだと疑うことは、普通この日本ではないのではないのでしょうか。子どもは保護者が買わないかぎり使えない。親たちの意識を変えるしかない。これについてはみなさんにご意見をいただきたい。

安全が保証されていない商品がこれだけ普及してしまった。これは消費者問題的な一面が明らかにある。

タブレットをみんなが持つ授業が本当にいいのか。府中市は20億円をかけて小中全33校の照明を一気にLED に変えるそうです（※注）。省エネだし、それにあてるお金もあるから替える、でいいのか？ フルーライトの問題はどうなるのか？ みんなで議論をしないで決めてしまっているのか、ということです。

※次のニュースを参照：<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/news/detail.php?newsId=20141031170721>

参加者：有識者は国が選ぶと政府寄りの人ばかり。どうしたら？

上田：その有識者を誰が選んだのか、どんな人なのか、どうして選んだのかくらいは聞く権利がある。選ばれてから批判するより選ぶ時に聞くべきでしょう。

参加者：理由は知らないが、子どもにスマホを使うのを制限させるという自治体があるようだ。幼稚園や子育てグループで話すくらいでは変わらないだろうから、自治体レベルでやるといいのではないのでしょうか。

上田：今の事例は、愛知県刈谷市の小中学校で2014年の4月から、スマホの夜間使用を制限する試みが始まったという話だと思います（※注）。これがどこまでうまくいくか注視したいと思っています。

※ 次のニュース参照：<http://www.sankei.com/life/news/140501/lif1405010006-n1.html>

大人が「今日は1日携帯もパソコンも使わないよ」、とあって、別の楽しい事をする日を作る。携帯や電子機器を使わない合宿をしてみるのもいいかもしれません。別の時間の過ごし方もあるんだ、違う楽しみもあるんだ、と体験させる。子どもたちは生まれた時から電子機器環境にいたので、本当の外遊びの楽しさを知らないのではないのでしょうか。今の子は外でおもいきり身体を動かして遊べない（親や社会がそうさせてしまっている）という悲しい現実があります。

参加者：子どもがいないのでわからないが、ボーイスカウトのキャンプでは電子機器を使わせないのでは？ そうならそういうところから発信してもらったらどうでしょう。

上田：ボーイスカウトは聞いてみたいです。伝統があるから、電子機器を使わせないかもしれないですね。

参加者：WHO も煙草や飲酒の問題では厳しくなっているから、そういう外圧にのるとか、保健体育でも指導要領に入っている。小中高でしっかり教育しているし、他の教科よりも保健体育は教科書の検定が厳しくない。または副教材として、携帯の危険性も取り上げるという手もあるのではないか。

上田：煙草とお酒は嗜好品だが、電波は公共的なもので、例えば、個々人の了解をとらずもと基地局を建てられるというのもそうした面の反映かもしれません。煙草は肺がん、酒は肝臓がんとかすぐ思いつくとありますが、では携帯電話は脳腫瘍なのか？ 煙草と同列に論じられるか？ と問い返されるのは確かでしょう。今のところ、煙草やお酒に比べてまだ不確定の要素が大きいことは事実です。ただ、世界的に規制が進めば、日本も無視はできない。学者のグループで「規制すべし」という提言しているグループは海外諸国にはあるのに、日本には一つもありません。ごく少数の医者らが少し声をあげているといった状態です。電波の研究者は基本的に、電波利用を促進するための研究をすることでお金をもらってきた人たちなので、健康影響については口をつぐみがちです。政治家の力が必要かと思います。学者と政治家、自治体と手を組んでいけば変えることができるかもしれないと思います。

公的な教育のテーマとして面白く取り上げられないかと思っています。「スマホ落ち」（寝るまでスマホを見ている）の問題などを保健の時間にとりあげないのはおかしいでしょう。「今日から夜はやめよう」と話しあえば、子どもも堂々とメールの返事をしないでもいられる。夜は7時までとか。話しあうのはとても重要です。子ども同志で決めるのが一番良い。生まれて間もない頃から携帯・スマホにどっぷりではまともな成長は決してできない。科学的解明は難しいが、それ以外のことに興味を持たなくなる。「それはおかしい」という人が周りにいないとならないのは明らかでしょう。

参加者；テレビが出だした頃と同じですよ。夜中まで見ちゃうとか。メーカーも大っぴらには認められない。子供用に1.5cm 離すしか通話できないような携帯を作らせるために、メーカーを呼んで意見を出したらどうでしょう。

上田：今はメーカーは「健康影響はない」という態度で通しています。でも1.5cm 離せと iPhone の説明書には書いてある。ガードをつけたら「健康影響がある」ということ認めたことになるので、やるでしょうか。

参加者：ベンチャー企業はやるのでは？

上田：この話は市民研で議論にあげてみたいと思う。面白いと思います。

参加者：(子どもが自然の中に置かれることが少ない状況を誰がどうしていったらいいのか) という趣旨の新聞の投書の記事を会場の方が上田に差し出した)

上田：自治体に何か子どもをケータイやスマホ以外に夢中にさせる健康的な事業の画期的なアイデアがあったら、他の自治体も真似るでしょう。今福島の子どもたちが、放射線被曝を抑えるために外遊びが制限されることが多かったので、他の所で遊ばせるという保養の事業をあちこちですすめてきましたが、参考になるのではないのでしょうか。海外での例ではドイツで週1回は外で遊ばせるという日が学校の中に組み込まれている、ということを知ったことがあります。

参加者：私の子どもは6歳なのですが、電車でお母さんがスマホを使うのを憂えているようですが、子どもが生まれた時はまだスマホがなくて、パソコンを開ける暇もなくて、あの時スマホがあれば友達と連絡をとったりするのに使ったと思うので、責められないなと思う。自分で寝る暇もないお母さん達を責めたくないのです。「私が赤ちゃんをあやしてあげるので、お母さんがスマホを使う30分の間、見てあげましょう」と言えばと思う。両方セットで言ったらどうなのか。

参加者：今のお話、私も賛成で、私も私が持っているおもちゃで遊んであげられたらと思います。

上田：これは個人を責める問題ではない。周りが皆使っているなかで自ら使用を制限するというのは難しいことだし、その利便性で得られるものが生活の不可欠の要素になっている現実も確かにあります。でも、10数年前には持っていない時代を誰もが経験しているわけで、「本当に必要なのか」という線引きをどこでするのが大事だと思うのです。携帯電話は非常に社会的な道具なので、どこまでを許容してしないかを線引きをしないと、引きずられて、つい無制限に使用を拡大することになります。携帯やスマホを使わなくても、連絡はパソコンのメールで済みます、という割り切り方もあり得るわけです。携帯を使っているお母さんは携帯の子どもへの影響をきちんと知った上で、子どもに使うことを容認しているのでしょうか。それによらずいぶん違うのではないのでしょうか。お医者さんがお酒や煙草と同じように、妊娠中から「子どもへの影響があり得ますよ」と注意してくれていれば、相当違うだろうと思います。責めるだけでは追い詰められるだけで、意味がないでしょう。Kさんなんて、優先席で携帯・スマホを使う人にずっとその場で口頭で注意を促しているのですよ。私はできないでいるんですが。

参加者：ノルウェーに飛行機で行ったら、モバイルフォンを使ってはいけないし、空港が無音でなんのアナウンスもないので、自分で気をつけて乗るしかないのです、そんな空港とは対照的に、日本人は常にアナウンスに依存しているのではないかなと思いました。環境によって人間は変わってしまうんだなど。違う環境に自分を置く経験があるといいのではと思っていて、「海外に行ったらっしょい」と若い方に言います。電車も携帯使えない車両を作っても良いと思うのです。ゲームをしている人が横にいたりしない、心静かに乗れる車両があってもいいのでは。

上田：ネットでつまみぐいの情報を得るのと、本を読むとか、人に聞くとかでは違う、ということがあります。何でもネットに書いてあって検索すれば「答えが得られる」という思い込みは、今おっしゃった「アナ

ウンス依存」と似たところがあるように思います。「答は自分の外側に用意されている」という受け身の姿勢です。

携帯を使えない車両を設けましょう、というのは、10年くらい前に関東のすべての鉄道会社に申し入れたことがあります。ほとんど耳を傾けてもらえませんでした（東急電鉄だけは前向きに受け止めてくれましたが）。もっと声が大きくなしないとダメですね。個人で言っている人は結構いるのです。もうひと押しなんとかできたら。本当にそんな車両が欲しいと思いますね。■

【次号に「講演の部：電磁波健康影響と依存状況に関する基礎データ」を掲載する】